

近代朝鮮における愛国婦人会の活動：統監府・朝鮮 総督府の統治政策との関係を中心に

千, 受珉

<https://hdl.handle.net/2324/7157281>

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（文学）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 千 受 珉

論 文 名 : 近代朝鮮における愛国婦人会の活動
—統監府・朝鮮総督府の統治政策との関係を中心に—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

愛国婦人会は、1901年から1942年の長きにわたり存続した近代日本における最初の全国的規模の婦人団体であり、戦死者やその遺族の救護をはじめとする軍事援護を目的として設立された。愛国婦人会については、女性史、社会福祉史、地域史など様々な観点から研究が蓄積されてきた。しかし、愛国婦人会は日本内地のみならず、植民地の台湾、朝鮮、租借地の満洲といった外地にも支部を設置していたが、先行研究はこれら外地の支部についてほとんど着目していない。それゆえ、愛国婦人会の活動を一国史の観点で分析しており、帝国日本の視点で捉えられていないという限界がある。

愛国婦人会の外地の支部の中で、本論文は朝鮮の支部に着目した。愛国婦人会の朝鮮での活動は、軍事援護という側面では日本内地と歩調を合わせていた一方で、朝鮮半島を保護国(1905～1910)・植民地(1910～1945)統治する統監府・朝鮮総督府の政策に従い活動するという、日本内地では見られない特殊性も持っていた。本論文では、愛国婦人会の朝鮮での活動を、日本の保護国・植民地統治との関係に着目しながら解明することを目指した。

第1章では、日露戦争の軍事援護を目的に朝鮮半島に進出した愛国婦人会が、1905年に朝鮮が日本の保護国となる過程で、保護国統治機関である統監府の政策に協力する半官半民団体としての役割を果たすようになる経緯を検討した。保護国化に伴い朝鮮に統監府が設置されると、愛国婦人会は同地に「韓国支部」を設け、統監府職員の夫人が同支部の役員として大量に入会した。統監府は保護国統治の円滑化のために親日的な朝鮮人を養成しようとしており、その対象を婦人にまで広げるため、愛国婦人会韓国支部に朝鮮婦人と「交際」することを求めた。本章では、愛国婦人会が統監府の要求に応じるため、元来、日本人の組織であった同会に朝鮮人が入会することを許可し、日本と朝鮮婦人の「交際」という新たな事業に着手した結果、統監府に協力する半官半民団体としての性格を持つようになる過程を明らかにした。

第2章では、視点を変えて、保護国期に日本赤十字社が朝鮮に下部組織を設置し、統監府の統治政策に協力していく過程に着目した。日本赤十字社は、朝鮮の保護国統治がはじまった時

期から愛国婦人会と協力関係を維持しながら日本の統治政策に協力していたため、朝鮮半島への日本赤十字社の進出過程を解明することは、同社と共同で活動していた愛国婦人会の半官半民団体としての性格を考察することにも直結する。本章では、日本赤十字豊田看護大学が保管している日本赤十字社の内部文書を用いながら、戦時救護・衛生事業を目的とする団体日本赤十字社が、朝鮮で朝鮮人の懐柔を目的とする活動を愛国婦人会とともに展開することで、統監府に協力する半官半民団体としての性格を持つに至る経緯をたどった。

第3章では、1910年の韓国併合による朝鮮の植民地化から1919年の三・一運動直後までの、いわゆる武断政治期を中心に、愛国婦人会の「朝鮮本部」が植民地統治機関である朝鮮総督府の政策の変化にどのように対応しながら、活動を展開していたのかについて考察した。朝鮮総督府は武断政治期においては、朝鮮人に経済的な自活の能力を身につけさせる政策を展開し、三・一運動後に統治政策を文化政治に転換すると、「内鮮融和」と呼ばれる同化政策に着手する。本章では、武断政治から文化政治への統治政策の転換に伴って、愛国婦人会朝鮮本部の活動が変化する過程を、教育事業を中心に浮き彫りにした。

第4章では、文化政治期における朝鮮総督府の統治構想に注目しながら、朝鮮に社会事業が導入される経緯やその性格を踏まえたうえで、愛国婦人会朝鮮本部が着手した社会事業の性格を分析した。朝鮮総督府は、円滑な植民地統治のために朝鮮人を懐柔する目的で社会事業を導入し、その実行において民間に協力を求めた。愛国婦人会の社会事業は、低価格の産院の運営や無料の乳幼児健康相談所の設置など、朝鮮婦人に対する懐柔の意味が含まれていたことが、本章の分析により明らかになった。

第5章では、1931年の満洲事変と1937年の日中戦争の勃発によって日本が非常時局に突入して以降、朝鮮総督府の統治政策が戦争遂行を目的とするものへと転換する中で、愛国婦人会朝鮮本部がどのような活動を展開したのかを考察した。まず、愛国婦人会が取り組んできた軍事援護、教育事業、社会事業、そのいずれもが朝鮮人を戦争に動員するためのものへと変化していく過程を示し、最後に1942年に愛国婦人会朝鮮本部が解散する顛末を論じた。

以上、第1章から5章にかけて、近代朝鮮における愛国婦人会の活動が、終始、統監府・朝鮮総督府による保護国・植民地統治政策と連動しながら展開していたことを解明した。最後に終章では、統監府・朝鮮総督府に対する協力が愛国婦人会側の利益になっていた点を論じ、愛国婦人会が一方的に統監府・朝鮮総督府に従っていたのではなかったことを示した。近代朝鮮における愛国婦人会の活動は、統監府・朝鮮総督府との利害の一致する関係性の中で、展開されたといえる。